

2019 年 1 月 26 日

「神戸発祥の総合商社の源流・鈴木商店を知る」勉強会 第 3 回

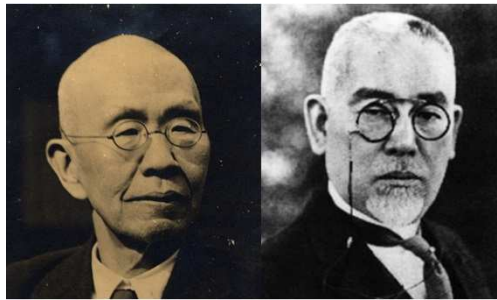
鈴木商店記念館 小宮 由次

金子直吉書簡シリーズ③「後藤新平宛て書簡(1) ～再製樟脳契約継続の件～」
(明治 37 年 4 月 2 日)

◇樟脳を求めて台湾進出、後藤新平との出会い

○台湾では樟樹^{くすのき}からは樟脳のみを採取し、油は廃棄していることを知り、「樟脳油に勝算あり」と着目。

○金子は、後藤新平が進める樟脳専売制度を支持、反対陣営を切り崩し、同制度の実現に尽力した。

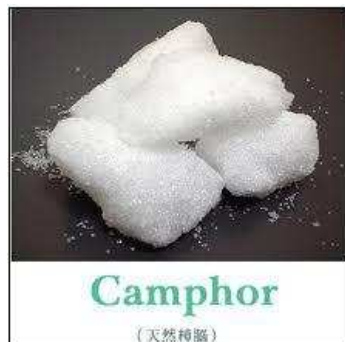


金子直吉

後藤新平

◇台湾樟脳油の専売権獲得

この功績を評価された鈴木商店は、樟脳油の大半の販売権を獲得し、神戸において直営樟脳製造所（後の日本樟脳ほか）を建設。生産事業へ乗り出す第一歩となった。



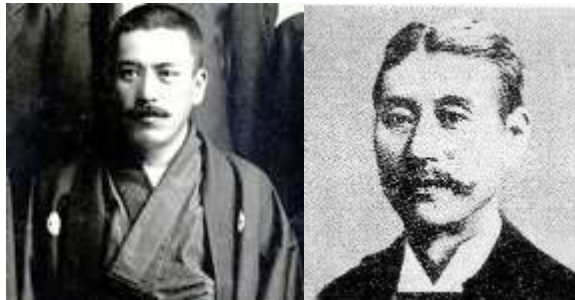
<天然樟脳（カンフル）と樟脳油>

かねがねひとみせい ねがいもうしあげ お き そうろうさいせいいうけおいけいやく
 ◇「兼々人見生よりお願 申上げ置き 候 再製受負契約継続の件も閣下のお引立
 てに預かり三ヶ年のご継続相願い申し 候 段 深く感謝の至りに御座候……」

○台湾総督府専売局より払下げられる“樟脳油”については、内地において“再製樟脳”および“精製樟脳”として商品化が進められた。

○一方、台湾総督府専売局自身による“再製樟脳”事業は、「直営方式」から「請負再製方式」に転換。内地再製業者を活用する方針。

○こうして再製樟脳については、明治 33(1900)年下半期より台湾総督府からの委託事業(請負再製)としても進められ、鈴木岩治郎(二代目)と池田貫兵衛*の二名に委託することにしたものである。

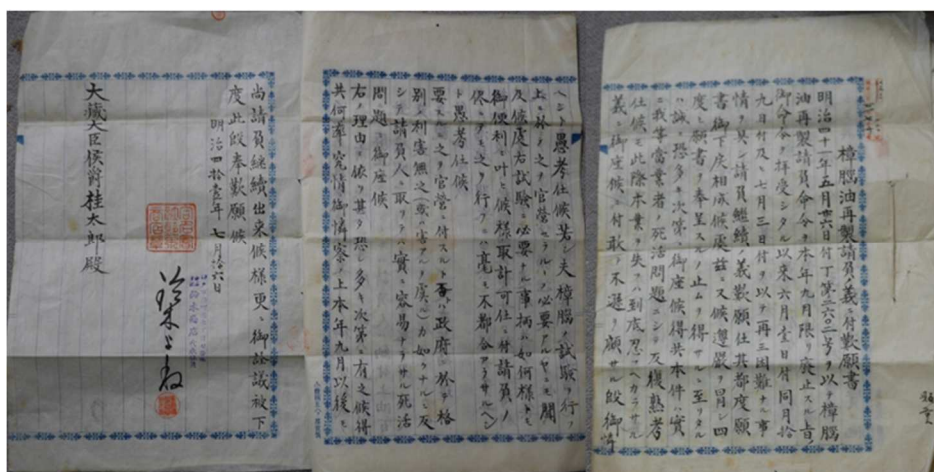


鈴木岩治郎

池田貫兵衛

○本書簡は、明治 37(1904)年に 2 回目の再製請負契約の 3 カ年継続を果たしたことに對する礼状。

◇台湾総督府専売局 “請負再製契約” 「樟脳油再生請負の義に付嘆願書」



金子直吉書簡シリーズ③「後藤新平宛て書簡(2)～関門調査による彦島活用の件～」
(明治 42 年 4 月 22 日)

◇関門海峡の航空写真



彦島
船島 (巖流島) 大里地区

＜上部＞山口県・下関とその突端にある彦島が写っている。彦島の東沖合には、宮本武蔵と佐々木小次郎の対決で有名な“巖流島”がある。この小島の正式な名称は、“船島”と云い、鈴木商店が一時所有していたこともあった。

＜下部＞九州・門司側で、彦島の対岸は、大里地区になる。

○本書簡は、大里への大規模な進出を果たした鈴木商店が、対岸の彦島への進出に先立ち、彦島の将来性とその活用について金子直吉の見解を伝え、同時に後藤新平の視察を要請するもの。

◇北九州大里・下関彦島にて工業団地を設立、製糖・製粉への進出

鈴木商店が北九州・大里に一大工業団地を建設するきっかけとなったのは、明治 36(1903)年の「大里製糖所」の設立であった。同製糖所は明治 40(1907)年、大日本製糖の求めに応じて同社に売却し、大日本製糖の一手販売権と同時に得た売却益を基に鈴木商店は多角化路線を進めることになった。



大里製糖所

○関門への進出を決意した鈴木商店は、「大里製糖所」の売却資金を基に「大里製粉所」を皮切りに大里、彦島に一大コンビナートの建設に舵を切ることになった。

○こうして大里の臨海部に鈴木コンツェルンが形成されて行く。鈴木商店の事業は、対岸の下関（彦島）にも及び、大正 5(1916)年の福岡日日新聞では“関門海峡は鈴木王国”として紹介された。

<大里地区>

- * 明治 36(1903)年、大里製糖所設立。
明治 40(1907)年、大日本製糖に売却。
- * 明治 44(1911)年、大里製粉所設立
- * 明治 45(1912)年、帝国麦酒設立
- * 大正 3(1914)年、大里酒精製造所
- * 大正 6(1917)年、神戸製鋼所・門司工場
- * 大正 7(1918)年、日本冶金（現・東邦金属）

<彦島地区>

- * 大正 4(1915)年、日本金属彦島製錬所
- * 大正 7(1918)年、彦島坩堝
- * 大正 12(1923)年、クロード式窒素工業
- * 大正 11(1924)年、山陽電気軌道

◇「彦島方面に鱧の瀬（ふかのせ）と申す遠浅有之此の地点将来有用なる
場所に相違無之候」

「鱧の瀬」は、現在の「荒田港」で当時は鱧（鮫）が多く獲れたことからこの地名が付けられたと云う。この鱧の瀬の将来性について有望なとの見解を述べている。後年、鈴木商店は彦島にも本格的な事業展開を行う。

◇～関門は物流の重要拠点であり清韓との連絡拠点～

◇「山陽鉄道の終点関門連絡及び内地と清韓との連絡点等は必ず此の地点を
埋め立て之を用うるに至るべし・・・」



旧下関駅（正面）と山陽ホテル



大連航路門司港

- 明治 34(1901)年に神戸と下関を結んだ鉄道（山陽鉄道）が全線開通し、関門地区が物流の重要拠点となった。
- さらに明治 38(1905)年に下関と釜山を結ぶ関釜連絡船の定期運航が開始されると下関は、清韓（清国と大韓帝国）との連絡拠点となっており、関門地区の重要性がますます高まってきた。

○また、明治 38(1905)年には大阪商船により大連航路が開設され、大阪～神戸・門司～大連を結び、門司港には、大連航路上屋が設けられ賑わった。

◇「門司方面には大里より突出せる半島有之候。九州鉄道は此の半島に延長し之に棧橋を設け・・・」

○明治 24(1891)年、九州鉄道(JR 鹿児島本線の前身)により開業された門司駅は、同鉄道の起点駅として対岸の下関駅間に就航した“関門連絡船”の中継駅として賑わった。

「門司駅舎」は、大正 3(1914)年に建て替えられ、旧駅舎より西側に移転、駅名を「門司港駅」と改称した。「門司駅」名は、元の「大里駅」に付けられた。

◇「彦島一体此の島は日本の政治家及び実業家等軽々に看過すべからざる処と存じ候」



荒田港(旧・饒瀬)

江の浦

○大里に続き彦島の将来性を期待する鈴木商店は、“彦島江ノ浦埋立計画”と同時に“造船所の建設”を計画した。一方の三菱も同様の計画を打ち出し、設立許可を巡って鈴木と三菱の競争が繰り広げられた。現在稼働中の三菱重工業下関造船所は

この競争に勝ち上がる形で大正 3(1914)年に三菱合資・彦島造船所として開業したものである。

○彦島での造船所計画が不調に終わった鈴木商店が彦島で事業に着手するのは大正 4(1915)年の亜鉛製錬工場・日本金属彦島製錬所(現・彦島精錬)からであった。

◇大陸渡航の皇族や政府高官も利用した山陽ホテル

○山陽鉄道が全線開通した翌年の明治 35(1902)年、山陽鉄道により馬関駅（後の下関駅）前に建てられた。下関と釜山を結ぶ関釜連絡船（明治 38(1905)年就航）の定期運航が開始されると下関は大陸への玄関口として賑わいを見せ、大陸渡航の皇族や政府高官は必ずこのホテルを利用するといった格式高いホテルであった。

○本書簡は、山陽ホテルに投宿している後藤新平に宛てて出されたもの。後藤は、明治 41(1908)年 7 月 14 日～明治 44(1911)年 8 月 30 日の間、第二次桂内閣の逓信大臣ならびに初代鉄道員総裁を務めたが、後藤が逓信大臣に就任する際、前職の満鉄を管理下に置くことを条件に引き受けたとも云われたことから、大陸への渡航のため山陽ホテルに宿泊したのかも知れない。

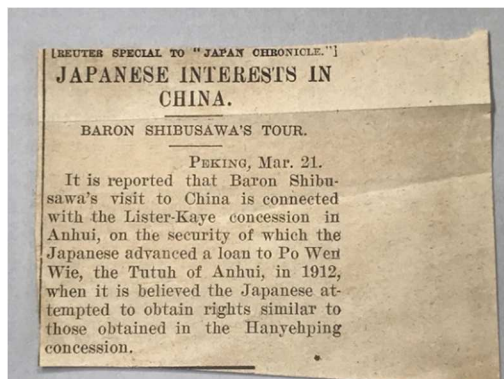


金子直吉書簡シリーズ③「後藤新平宛て書簡(3)～内閣総辞職、濱口雄幸処遇の件～」
(大正3年3月24日)



しぶさわだんしゃく と しん ようむ うかが お そうろうところ
◇「**渋澤男爵渡清の用向き伺い上げ置き候処**、神戸クロニクルに別紙の
これあり
記事有之・・・」

渋沢栄一記念財団・渋沢史料館”の記録によれば、第一次世界大戦が勃発する直前の大正3(1914)年5月に、渋沢栄一は辛亥革命による混乱が続く中国を訪問した。孫文、袁世凱、盛宣懷(李鴻章の幕僚(補佐役))など中国政財界人に面談する一方で、漢詩や書を通じて、文化交流を行った。20世紀初頭、国際社会の構造が大きく変容するなかで日中関係に少なからず影響を及ぼした渋沢の訪中は、国際的にも注目された。



* 神戸クロニクル・・・神戸外国人居留地で発行された英字新聞社。明治23(1890)年、米人ロバート・ヤングにより創刊、当初は週刊、後に日刊となる。海外向けの表題は、ジャパ・クロニクルに改題。同社には、松江での英語教師の契約を終え、作家となるまでの期間、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が記者として勤務した。

◇「^{げんないかくいよいよそうじしょく} 現内閣愈々総辞職^{よし}の由、この際^{はまぐち}濱口雄幸^{おさち}の件^{しか}然るべき地位^{そんばい}にご尊配下
され^{そうろうよう}候^お様願^{そうろう}い置^き候^候」



第1次山本（権兵衛）内閣（大正2（1913）年2月20日～大正3（1914）年4月16日）は、1年余の短命で終わったが、総辞職間近の流動する政局から、金子直吉は信頼する後藤新平に対して金子と同郷の濱口の次期内閣における然るべき処遇を要請したのが本書簡である。

これに応えた後藤の働きもあり、濱口は第2次大隈内閣では大蔵次官（大正3（1914）年）および新設されたポスト・大蔵参政官（大正4（1915）年）に任命された。

その後、政界に転じ大正4（1915）年、立憲同志会に入党、衆議院議員に当選し政治家としてデビュー。

◇専売局長から政界入り

浜口雄幸のプロフィール



第27代内閣総理大臣

1870年 高知県生まれ
1891年 第三高等学校卒（幣原と同輩）
1895年 東京帝国大学卒 大蔵省入省
大臣経費を削減しようとして
秘書官と衝突し、左遷される
1907年 専売局長官に就任。塩田整理を担当
1915年 後藤新平に請われ、政界入り

○濱口と金子は、共に高知の出身、濱口は、明治3（1870）年、長岡郡五台山（現・高知市）の生まれ、金子は、^{あがわぐん}吾川郡名野川村（現・吾川郡仁淀川町）の生まれ、年は、金子の方が4歳年長。

濱口と金子の仕事上の関わりは、濱口が専売局長官（明治40（1907）年就任）の時代、鈴木商店が国策会社・東亜煙草を買収し、専売局の許可を得て輸出を図ったことから始まった。

○“ライオン宰相”の名で親しまれた浜口雄幸のプロフィールは、ご覧の通りですが、濱口の政界入りについては、専売局時代から度々、後藤新平より誘いを受け、大正4（1915）年、立憲同志会に入党、同党が憲政会として再編成されるとその幹部として登用され政治家としての歩みを始めた。

金子直吉書簡シリーズ③「後藤新平宛て書簡(4)～露国からの樟腦の注文の件～」
(大正3年10月13日)



Camphor

(天然樟腦)

◇「^{ろこく}露国より^{せいせいしょうのう}続々精製樟腦の^{これありそうろうところ}注文有之候^{ばくだい}処、その数莫大にして全体
^{いか}如何なる^{もち}用途に^{そうろうや}用い候哉・・・」

第一次世界大戦以前のヨーロッパで露独間の緊張が高まりつつあった大正3(1914)年3月、鈴木商店はロシアより大量の精製樟腦の注文を受けた。樟腦の相場に影響を及ぼすほど大量の注文であること、樟腦が無煙火薬の原料ともなることから金子直吉が後藤新平にロシアの注文の真意を調査依頼したのが本書簡である。

◇「全体^{いか}如何なる^{そうろうや}用途に^{せきたんさん}用い候哉・・・或る者は^{これ}石炭酸^{ようかい}欠乏の為に之を溶解
して^{ふしょうしゃ}負傷者の^{しょうどくよう}消毒用に^あ充つると云いまた^い爆裂弾^{ばくれつだん}火薬等の原料に使用する
と云い・・・」

大量の樟腦の注文は、果たして“石炭酸の代替”としての消毒用なのか、急速に需要が広まった“無煙火薬”用なのか？

<石炭酸>

消毒薬の代表的なもののひとつに、石炭酸（フェノール）がある。石炭酸の殺菌効果は多くの人々に確かめられ、手術器具や傷口の消毒に広く使用される様になっていた。

この石炭酸は軍事物資としても重要で、砲弾の炸薬（爆薬）はピクリン酸を主成分とする下瀬（しもせ）火薬であった。石炭酸はピクリン酸製造の原料で、この最新兵器を作るのに不可欠であった。

<樟脳を原料とする無煙火薬>

一方、樟脳を原料とする“無煙火薬”は、火器の発射薬として優れていることから速射砲や機関銃等自動火器の信頼性を高めるとされた。

◇「もし露国より派遣せられ居り 候 軍人にご面会相なる機会御座候はば
其の用途をご探聞の上ご内報を賜わり 候 はば誠に有難き仕合せに存じ 候 」

○日露講和条約（ポーツマス講和条約）締結度、日露関係は戦略パートナーにまで緊密化。パールイシェフ・エドワルド氏の論文（2013年3月 「北東アジア研究」）

第一次世界大戦期の「日露兵器同盟」と 両国間実業関係

—「ブリネル&クズネツォーフ商会」を事例にして—

パールイシェフ、エドワルド

はじめに

1. 戦争初期における日露軍事協力および「ブリネル&クズネツォーフ商会」の働き
2. ロシア政府との新たな受注契約の準備——貨車組立案と亜鉛製錬案
3. ロシア砲兵本部による3インチ砲弾 22秒信管 400万個発注の背景
4. 日露両国陸軍当局の姿勢と「株式会社松田製作所」の成立
5. ソーモフ中將の来日と信管製造事業の整理

第一次世界大戦期における日露軍事協力の背景

—三井物産の対露貿易戦略—

パールィシェフ、エドワルド

はじめに

- 1) 「欧州戦乱」の勃発と対露「時局商売」の開始
 - 2) ロシア内における三井物産のパートナーとロシア陸軍省経理本部への軍需品供給
 - 3) 「時局商売」の諸問題とロシア市場における三井物産の模索
 - 4) 三井物産の対露貿易方針とベトログラード出張所の創設
- 終わりに

はじめに

第一次世界大戦期における日露関係は、これまで日本・ソ連・米国の研究者たちによって丹念に検討されてきたが、これらの先行研究の焦点は両国間の外交関係に当てられていると言えよう¹。近年、1914～1917年の「日露友好の時代」が再び注目されるようになり、その社会史的ないし文明史的な背景を対象とする研究が現れてはいるものの、同時代の日露接近の中核をなしていた「兵器同盟」²についてはいまだ解明されていないところが多

日露皇室外交

1916年の大公訪日

パールィシェフ エドワルド 著



コーポレーション

同時期、大正 4(1915)年、鈴木商店はロシアより砲弾 500 万発の注文を受けた。(天下三分の宣誓書)

◇「昨夜^{たつみこじろう}異来次郎 朝鮮より^{つかまつそうろうところ}帰国仕り 候 処 相変わらず言語は不明に
御座^{ござ}候得共相手方の話は充分に理解せられ 割合に^{あいみ}元気に相見え申し候・・・」

大正 3 年 10 月 13 日付書簡 巽の病状報告。未だ 後遺症残っているが回復に向かっている。

後藤新平宛て書簡に度々巽からの支那情報の記述あり、支那関係の情報収集を依頼していたようだ。

巽は、鈴木商店のほか多くの政財界人とも関係があり、大隈重信や、寺内正毅（まさたけ）へも頻繁に支那情勢について書簡を送っている。

金子直吉書簡シリーズ③「後藤新平宛て書簡(5)～大連支店長・平高を張作霖に紹介する件～」 (大正 11 年 5 月 25 日)



◇「辛亥革命前後の激動する中国大陆の政局」



○清朝末期の政情は、漢民族による反満意識が高まり、清朝打倒のうねりは辛亥革命（1911 年）をきっかけに歴史的な大転換に動き出した。

○1912 年、孫文による「中華民国」が南京に成立するも革命運動は収まらず、革命の主導権争いが激化した。孫文～袁世凱～張作霖と目まぐるしく革命の主役が変わって行った。

○辛亥革命から 10 年目の大正 11(1922)年、袁世凱亡き後、張作霖が実権を握りつつある時期、鈴木商店大連支店の支店長交代人事が行われ、平高寅太郎が支店長に就任した。

◇満鉄経営の大連油房を譲り受け鈴木商店大連工場を設立

～満鉄大連油房から鈴木商店大連工場“鈴木油房”へ～



鈴木商店大連工場（後の豊年製油）



南満州鉄道（満鉄）本社

○平高が赴任する以前の大連

大正4(1915)年、南満州鉄道（満鉄）経営の「大連油房」を譲り受けこれを鈴木商店大連工場としたほか、内地において清水(大正6(1917)年)、鳴尾、横浜(いずれも大正7(1918)年)に工場を建設する。

○「大連油房」買収については、満鉄第二代総裁・中村是公（通称ぜこう）^{よしこと}の時代（明治41(1908)年12月19日～大正2(1913)年12月18日）に交渉し、内地にも工場を数か所設けて製油事業を国家的な大事業に育てあげてを条件に譲渡が成立していた。（「金子直吉伝」）

◇南満州物産と鈴木商店大連支店は、二人三脚で業容拡大したが・・・

○鈴木商店では大正2(1913)年からベンジン抽出製法による製油事業を行い、満州における有力な油房となりつつあった。大正4(1915)年、鈴木商店が大連油房を買収して「鈴木商店大連工場（鈴木油房）」を設立すると、鈴木製の製造事業の受け皿会社“南満洲物産”は同年に鈴木商店からこの製油工場の経営委託をされ油房業に進出した。

○鈴木商店大連支店は、国策会社「東亜煙草」の経営および満州特産物の穀物類の取扱いを基盤に、南満洲物産と共に製油事業を柱に事業の拡大を図った。

○しかし、同大連支店では、原料・大豆の先物取引に失敗し多額の損失が発生した。鈴木商店本体の経営に影響を及ぼしかねない異常事態で、大連支店の早急な立て直しが避けられない状況となった。

この事情は、武田晴人氏の「鈴木商店の経営破綻」に記されている。



◇「平高を張作霖へ紹介する御尊書藤田より伝達せられ正に拝受誠に有難く
存じ候」



藤田謙一

○鈴木商店大連支店の支店長交代人事は、多額の損失処理と大連支店の立て直し、金融機関に対する信用回復のためのエース投入であった。

○大正 11(1922)年、鈴木商店本店・西川文蔵支配人の実弟・西川貴地から平高寅太郎への支店長交代人事であった。

○本書簡は、平高を大連支店長として送り出すに当たって金子直吉が、後藤新平に満州の実権を握っており支那全土を掌握せんとする奉天軍閥の首領・張作霖への引き合わせを要請し、後藤新平よりの紹介状を藤田謙一（鈴木商店顧問）通じて拝受したことの礼状である。

◇ “「鈴木の台湾探題」の異名にふさわしい業績と事業基盤を台湾の地に残した
平高寅太郎”



北港製糖所跡

平高は、金子直吉による鈴木商店の快進撃を支えた大幹部の一人で、取り分け、鈴木商店発展の出発点となった台湾を舞台に製糖事業を中心に業容の拡大に尽力した。

領台初期の樟腦事業を除けば、鈴木商店が台湾で新たに手がけた事業は、すべて平高によって企画・実行されたと云える。

鈴木商店が台湾において、本業の商業はもとより製糖業はじめ様々な産業部門へ進出して財閥系商社と勢力を二分する地位を確立できたのは、ひとえに平高の辣腕による積極的な事業展開による成果であり、まさに「鈴木の台湾探題」の異名にふさわしい業績と事業基盤を残した。

◇ “平高の大連支店再建は、製油事業の再構築から”



平高が大連に赴任した大正 11(1922)年、鈴木商店は、製油部門を分離独立し、「豊年製油」を設立した。新会社の社名は、“大連油房”の商標・豊年^{ばらまめかす}撒豆粕に由来して決定した。

豊年製油は大連、清水、横浜、鳴尾の 4 工場を営業権とともに継承し、本社は神戸市海岸通の鈴木商店内に置かれた。豊年製油は、順調に事業を伸ばし、大正 14(1925)年には、我国の大豆油生産高の 70%のシェアを占める程 になった。＜鈴木商店製油工場（大連、清水、横浜、鳴尾）と豊年印＞

鈴木商店大連支店の経営状態も漸く回復の兆しが見られた。